

第 18 回国際河川シンポジウム (オーストラリア・ブリスベン) 参加報告

JRRN 事務局／水循環・まちづくりグループ 研究員 後藤 勝洋

1. はじめに

2015年9月21日～23日の期間、オーストラリア・ブリスベンにて、第18回国際河川シンポジウム(International Riversymposium 2015)が開催されました。本シンポジウムは、オーストラリアのNGO「国際河川財団」が主催で、1998年から毎年開催されているもので、河川再生に関わるオーストラリア国内及び世界の成功事例を、河川再生の担い手である様々なセクター関係者で共有し、河川及び流域の生態的・社会的価値を高めることを目的とするシンポジウムです。本シンポジウムでは、優れた河川再生活動に対して、「国際河川賞(International Riverprize)」などの表彰を行い、本分野では名誉ある賞の一つとして世界的にも認められています。本年は、「Healthy Rivers – Healthy Economies(健全な川と元気な経済)」を主テーマとして、約40ヶ国から河川に関わるNGO、行政機関、民間企業等の関係者が参加しました。

本シンポジウムにおいて、JRRN(日本河川・流域再生ネットワーク)では、その親組織であるARRN(アジア河川・流域再生ネットワーク)主催の「アジアの河川再生」分科会を運営するため参加して参りましたので、その開催概要及びブリスベン市内の現地視察について報告致します。



国際河川賞 2015 授賞式

2. 「アジアの河川再生」分科会

9日22日(火)午後、ARRN主催の「アジアの河川再生」分科会を開催し、日本ならびに韓国から河川再生に関する話題提供を行い、会場参加者との意見交換を行いました。

JRRN事務局として当研究所からは、「水都・東京の川と水路の記憶」と題した講演を行い、「50年前の東京オリンピック等で失われた東京の水辺を、5年後の東京オリンピックに向けて再生しようと動き始め

ているので、期待して日本に来てください」というメッセージを発信しました。講演に対する意見交換では、会場の反応としては環境よりも治水に対する関心の高さが伺われましたが、「東京の素晴らしい水辺にも過去に暗い歴史があることが理解できた」というコメントもいただき、過去の脱却があって今の東京の水辺の姿があるということ、英語などの外国語できちんと資料としてまとめて情報発信していくことの重要性を認識するものでした。

■分科会名：「アジアの河川再生」

■日時：2015年9月22日(日) 14:00 – 15:30

■会場：ブリスベン国際会議場 Room P9

■プログラム：

- ①水辺の小さな自然再生～日本の事例紹介 (JRRN・和田)
- ②自然河川での藻類繁茂を抑制するためのEPPボールを活用した光触媒の評価 (KRRN・Jin Cul JOO)
- ③水都・東京の川と水路の記憶 (JRRN・後藤)
- ④韓国における日ばつ救世主としての台風の役割 (KRRN・Ji Young Yoo)
- ⑤漢河における潜り堰と潮位による河床と水位変化 (ARRN会日/KRRN・Suk Hwan JANG)



「アジアの河川再生」分科会関係者

3. ブリスベン市内視察

シンポジウムの合間に、ブリスベン市内の川や街の様子を視察しましたので、写真で紹介致します。



- ①ブリスベン市内を流れるブリスベン川と舟運。ブリスベン川を渡る橋が少ないため、渡し船として舟運も主要な交通手段の一つとなっています。有料の青いフェリーと無料の赤いフェリーの2種類が運航しており、運航時間や距離が異なります(有料は15分間隔、無料は30分間隔の運航)。



- ②ブリスベン川の上に建設された自動車道。東京の水辺を彷彿とさせる風景ですが、ブリスベンでも同じ問題を抱えています。



- ③ブリスベン川沿いのマングローブ群。フェリーの航走波などで侵食されていますが、生態系の重要性に鑑み保護に取り組んでいるようです。



- ④レンタサイクルステーション。ブリスベン市内の至る所にレンタサイクルステーションが設置されており、自転車の利用を推奨しているようです。日本の自転車専用レーンは道路の端が一般的ですが、ブリスベンでは道路の真ん中に設定されており、見ていてちょっと恐いです。また、ブリスベン川の上には長大な自転車専用道路が建設されており、フェリーと

並走する自転車の姿が見られます。



- ⑤道路の真ん中に設定された自転車専用レーン



- ⑥ブリスベン川の上に建設された自転車専用道路

4. おわりに

国際河川シンポジウムは、これまでオーストラリアの主要都市で開催されてきたこともあり、おそらく日本の河川に関わる団体内での認知は十分でないと考えられ、今回の日本からの参加者は我々だけでした。会場参加者からは、優れた河川再生の経験を蓄積している日本の団体からの国際河川賞応募への期待の言葉を多数いただきました。また、シンポジウム主催者である国際河川財団幹部との交流でも、国際河川賞の受賞に向けた助言(様々なセクターでの協働成果であることが大切、単年ではなく複数年応募し続けることが必要など)をいただきました。来年度のシンポジウムは、初めてのアジア、インド・ニューデリーでの開催が予定されており、JRRNとして、いつか日本の河川の取り組みが国際河川賞に選ばれることを目指して、海外関係者との交流を深めながら、国際河川賞に関わる様々な情報を国内に発信して参ります(下記URLより、“国際河川賞 2016”応募要領を参照できます)。

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/665.html>

JRRNは、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に事務局の共同運営を行っています。